

リーシェ」(決まり文句)である(ザイデルフェルト, 1986)。そこで、著者が提案するのが、ビジネス用語の「PDCAを回す」と行政用語のKPI, NPM(NPMM)の安易な転用の禁止, アクティブ・ラーニングや意味不明なポンチ絵, 蒙昧主義的作文技術の廃止, そして政策レベルよりも実施レベルのEBPMの必要性である。

本書は、迷走する大学改革に対して明快な診断が示されているが、序章で断っているように「20年後の再生」に向けた政策提言を目論んだ論集ではない。だが、「自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」(392頁)とある。答申の文言を政策側に返した一撃である。本書は、政策言説の知識社会学的分析, 中教審委員としての参与観察, 当事者の率直な語り, そして反面教師としてREFのゲーミングなど周到に編集され、時期に適った論集である。5名の著者による「蛇の一刺し」に多くの大学関係者は納得するであろう。

【参考文献】

ザイデルフェルト・A. (1986) (那須壽訳) 『クリーシェ』 筑摩書房。

溝上慎一責任編集・京都大学高等教育研究開発推進センター／河合塾編

『高大接続の本質「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題』

(学事出版, 2018年, 206頁)

大膳 司 (広島大学)

本書は、高校時代までにタフな若者のコアができあがっているのではないか、すなわち、高校生までの間に、人生を力強く生きていく基礎・基本が形成されていることが、その後の、大学教育や職業生活を規定してくる、という仮説を検証するために、高校2年生を対象に2013年に第1回調査が実施され、その後、3年後以降の大学1年生, 2年生, 4年生に、そして、9年目の社会人3年目の合計5回追跡調査が計画されている中で、大学1年生を対

象とした第2回目の調査結果報告書である。

以下では、本書の目次及び各章の概要を示し、今後の本研究に対する期待を提示したい。

目次

はじめに

第1章10年トランジション調査の前史

1. 1997年～大学生研究の幕開け
2. 2007年～大学生のキャリア意識調査の実施
ー学業とキャリアを架橋してー
3. 大学生研究フォーラムの開催
4. 高大接続への発展
5. 10年トランジション調査の企画と全国で進む教育学IR
6. まとめ

第2章 10年トランジション調査の2時点目(大学1年時)までの成果

ー高校生は大学生になってどの程度変わるかー

1. 10年トランジション調査の企画と実施概要
2. 1時点目(高校2年時)の結果
3. 2時点目までの結果
4. 総合的考察

第3章 高大接続と受け入れる大学側の観点から結果をどう見るか

1. イントロダクション
2. 高大接続の観点から
3. 受け入れる大学の観点からー「生徒」が「学生」に成長するために必要なことー
4. リプライ

第4章 トランジションの研究成果に基づいた高校の実践事例

1. イントロダクション
2. 新校開校に向けた学校改革
3. 大学&社会で活躍できる力をつけるために
ー桐蔭学園のAL型授業改革の目指すものー
あとがきにかえて
ーまとめと今後の課題ー

各章の概要

第1章では、最初に示された仮説がいったいどのように生まれてきたのか、ひいてはなぜ彼らが10年トランジション調査を行うに至ったか、その前史を振り返ってい

る。この「前史」は、キャリア教育、アクティブラーニング、学びと成長、高大接続、学校から仕事・社会へのトランジションという理論や概念、実践を産み出してきたもので、これらは、結果として、今日進められている文部科学省施策に深く関わるものとなっている。

第2章では、10年トランジション調査の1時点目（高校2年生）から2時点目（大学1年生）までのデータ分析結果をまとめている。

内容は、次の6つのポイントにまとめることができ、これらは、上記で示してきた仮説を検証する結果となっている。

第1は、高校2年時における4つの資質・能力（他者理解力、計画実行力、コミュニケーション・リーダーシップ力、社会文化探求心）は、大学1年時のそれぞれの資質・能力に大きく影響を及ぼしている。

第2は、大学1年時で主体的な学習態度を持っていることが、資質・能力を身につけるための、アクティブラーニング外化を行うために重要である。

第3は、大学1年時の主体的な学習態度は、同じく大学1年時の二つのライフ（将来の見通しの有無と将来の見通しの実現に向かって日々何をしたらいいか、それを行動に移しているかの理解実行）で説明される。その二つのライフは、高校2年時のキャリア意識に大きな影響を受けている。

第4は、高校2年時の資質・能力のなかでも、計画実行力は大学1年時の主体的な学習態度に影響を及ぼし、コミュニケーション・リーダーシップ力は同じく大学1年時のアクティブラーニング外化に影響を及ぼす。

第5は、特にジェンダー、大学偏差値、学部学科、中高一貫校、等の属性・社会的要因が、資質・能力や学習、キャリア意識に影響を及ぼしている。

第6は、高校2年時の勉学タイプ、勉学そこそこタイプは、大学1年時の学びと成長（資質・能力・学習、キャリア意識）につながる生徒タイプである。授業外学習を行う、キャリア意識が高い、対人関係、自尊感情が良好であること、これらすべてをバランスよく持ち合わせることがポイントである。

第3章では、高大接続や受け入れ側の大学の観点からこれらの調査結果をどう見るかということが論じられている。

第4章では、送り出す高校側の実践事例として、京都市立塔南高等学校「新校開校に向けた学校改革」、神奈川県立桐蔭学園中学校・高等学校「大学&社会で活躍できる力をつけるために」が紹介されている。いずれの

学校も、2013年の10年トランジション調査に参加し、その後もエビデンスを収集して高校生の実態をふまえた教育改革を行っている学校である。

最後に、あとがきにかえて「まとめと今後の課題」が記された。なお〈巻末資料〉には、10年トランジション調査の調査項目や分析に使用した変数がまとめられている。

本研究への期待

成長・発達の大部が累積的であるとすれば、本書で指摘されている通り、高校までに蓄積された知識や技術や心構えが、その後の成長・発達に有意に影響していることは当然のことであろう。

大学教育研究者の立場から、本研究の今後の進展において、以下の3点について検討いただければありがたい。

第1に、本書で安彦氏も指摘しているように、大学入学後のアクティブラーニング等の学修活動や入学大学のブランド力が、大学卒業後の活動面（2021年調査結果）からみて、学生の資質形成にどのように影響しているのかという点である。言い換えれば、学生が入学時の課題を克服して、社会が求める資質を形成できる環境や活動は何なのか、という点であろう。

第2に、近年、経済活動のグローバル化に対応できる人材育成のために、大学は様々な種類の海外留学を準備している。その結果、2〜3週間の短期留学プログラムなどは単なる海外旅行に終わるだけで、グローバル人材育成にとって無意味ではないか、との意見も出されている。様々な留学プログラムがどのような効果を持っているのか確認できないだろうか。

最後に、Society5.0型人材養成の目的で課題解決型の文理融合教育が推奨され、新学部・学科も設置されている。これらの新学部・学科の学生が、在学中にどのような能力を身につけ、社会からどのように評価されるのか、こちらも検討いただければ貴重な情報となる。

今後、第3回〜第5回までの調査結果が出版されると思われる。早く手にしたいものである。